

《菅原 直樹》氏

老いと演劇～認知症の人と“いまここ”を楽しむ～

介護経験で気付いた介護と演劇の相性の良さ

僕は岡山県奈義町で「O i B o k k e S h i」（オイボッケシ）という劇団を主宰しています。「老い」「ぼけ」「死」で「O i B o k k e S h i」です。

私は介護士として介護の現場に携わっていました。一方で学生の頃より演劇に非常に興味を持っていました。高齢者の介護に実際に携わる中で、次第に介護と演劇は非常に相性がいいのではないかと強く思うようになり、演じることを通じ、高齢者の方への接し方と介護の魅力を伝えるとともに、高齢者の方と一緒に演劇を作りたいという思いで劇団を立ち上げました。

本日は、これまでの自分の経験から気付いた、「お年寄りほどいい俳優はいない」、「介護者は俳優になったほうがいい」ということについて、皆さんにお話ししたいと思います。

お年寄りほどいい俳優はいない

初めての「演劇ワークショップ」でのこと。とある88歳のおじいさんが参加されました。

ワークショップでは芝居づくりとその発表の場面があるのですが、このおじいさん、演技をやらせたら、まさに水を得た魚。耳が遠かったはずが、芝居が始まると耳がよくなるのです。その場にいた全員が驚きました。ワークショップが終わってから改めて話を聞くと、昔から芸事が好きで、定年退職後は憧れの映画俳優を目指して数々のオーディションを受けてきたという、実は一番演技経験がある方でした。これが以後「O i B o k k e S h i」の看板俳優となる、岡田忠雄さんとの出会いです。いまは96歳、現役で舞台に立たれています。

岡田さんは、舞台にかける情熱はものすごく熱いのに、セリフを覚える気は一向にありません。そこで、岡田さんは僕が話を振ると同じ話を繰り返してくれるところに目をつけ、よく岡田さんがする話を台本に組み込んだところ、台本を一切見ずに見事な演技を披露してくれました。

「役割」が人を輝かせる

これは全ての人に言えることですが、岡田さんのように、人は自分に合った役割を見つけると、いきなり輝き出します。老人ホームのお年寄り方も、これまでの人生で、サラリーマン役、主婦役、お父さん役など、様々な役割を持って生きてきたわけです。しかし、年を取るにつれてそういった役割を奪われていってしまうのではないかと、しかし人は生きている限り、何らかの役割を持ちたいと思っているのではないかと思います。

そうしたお年寄りに合った役割を見つけることも、介護の重要な仕事。お年寄りの人生のストーリーに耳を傾け、今の状態を把握し、そのお年寄りに合った役割を見つけるというのは俳優に役を与え、生き生きと演じてもらうという、演劇の演出家の仕事にも似ていると思うのです。

演出家次第で俳優はいきなり輝き出すように、老人ホームでも、自分に合った役割を見つけると、いきなりお年寄りが輝き出します。そういったことに関われる介護の仕事は、とても魅力あるものだと思います。

介護者は俳優になったほうがいい

皆さんの中で演劇らしい演劇をしたことのある方は少ないのではないかと思います。日常生活では演技をしたことがあるのではないかと思います。例えば、高い買物をして、家族から「そんなもの買ったのか」と言われ、「いや、バーゲンで安かったから」と言っとうそをついたりするわけです。そういったうそも、演技といえば演技。また、社会的な立場が、何か演技を強いるということもあります。警察官は警察官らしく演じ、その警察官も、家に帰ったら、奥さんの前では夫を演じ、子どもの前ではお父さんを演じ、同窓会に行ったらやんちゃな少年を演じているわけです。

こうした日常生活での演技は、「言われてみればこれも演技かな」という程度だと思うのですが、介護現場での演技は、もう明らかな演技です。例えば、老人ホームの廊下を歩いているときに、お年寄りがやってきて、僕と擦れ違うときに、「あら、時計屋さん」と言ってきます。「いや、僕は時計屋さんではありません」と言って擦れ違えます。後で同じお年寄りがやってきて、また「あら、時計屋さん」と言ってきます。このときに、僕は介護者として時計さんを演じる俳優になってもいいのではないかなと思うわけです。

認知症のお年寄りと関わりを持ったことがある方の中には、認知症の人の言動を正すべきか、受け入れるべきか、ただ受け入れると相手はその世界に入ってしまう、戻ってこなくなるのではないかと悩まれる方も多いでしょう。私もかつて「たんすの中の人にも食事をあげる」という発言をする祖母に対し、どう接するべきか相当悩んだものです。

確かに認知症の人は、こちらからするとおかしな言動や行動が増えてきます。しかし、それは認知症の「中核症状」と呼ばれる見当識障害、記憶障害があるから仕方がないことなのです。

にもかかわらず、一々言動を正したり、失敗を指摘したりしては、認知症の人の気持ちはかなり傷つくのではないかと思います。論理や理屈は通じないかもしれませんが、喜怒哀楽といった感情は当たり前のように残っているので、認知症のお年寄りとの関わりにおいては、論理や理屈ではなく、認知症の人に見える世界を尊重した感情に寄り添う関わり方をしたほうがいいのではないかな。そうなると、時には僕らの常識からすれば間違っていることでも受け入れたり、僕らには見えないものも、見たふりをするという演技が必要になってくるのではないかなと思ったのです。

認知症の症状

認知症には、中核症状と行動・心理症状という2つの症状があり、「中核症状」は現代の医学で治すことは難しいと言われていて。一方、行動・心理症状は何らかのアプローチで改善されると言われています。それは薬の調整や介護などの関わり方を見直すということです。つまり、中核症状によって、いわゆるおかしな言動や行動が増えてしまうことは、仕方がないことなのです。中核症状に対して、周りが否定や無視をすることで感情が傷つき、ここは自分の居場所じゃないと思って徘徊が始まったり、自分の言っていることを全く受け入れてくれないことで、介護への抵抗が始まるわけです。悪循環の介護現場というのは、中核症状に対して介護者が否定したり、無視するなどによって感情が傷つき、行動・心理症状が発症し、介護者がまたその対応に追われてしまうということが起こっています。認知症の人に接するときはぜひ、プライドや自己肯定感を大切にしたい関わりをしていただければと思います。

今ここを共に楽しむ接し方

私は、これまでの経験から、認知症というものに対して、結構楽観的になることができました。というのも、認知症の人は、今この瞬間を楽しむことはできるからです。これは大きな希望だと思いました。

頭の中に残っている過去の景色も美しいけど、今この瞬間に広がる景色の豊かさに気づくことも高齢の方に接する上でとても大切ではないかと思います。

介護は正直しんどいこと、辛いことの連続だと思います。しかし、関わり方を見直すことにより、一気に楽になることもあるのではないかと思います。これからは超高齢社会です。地域で認知症の方と接する機会、またご自身が認知症になることもあると思います。ぜひ、今ここを共に楽しむ生活をしていただけたらと思います。